



① 2021年12月に開院した新病院 ②薩摩切子がモチーフの日よけを配置したエントランスホール ③「地域の期待に応え、働きやすい病院にしたい」と語る池田佳広病院長

鹿児島市中央地域にあった旧病院から約8キロ南の谷山地域へ新築移転し、2021年12月から診療を開始した鹿児島徳洲会病院(310床)。新病院建設計画の陣頭指揮を執った池田佳広病院長は、移転を機に救急医療や離島医療などに力を入れたと語る。

◎薩摩切子や火山灰 鹿児島らしさイメージ

経営の改善と、築30年以上が経過した施設の新築移転を成功させるため、池田病院長が同院に就任したのは2018年。早期に経営を軌道に乗せ、その後、新病院建設計画に注力して20年1月に着工、翌年12月にオープンを迎えた。

新病院は地上7階建て、延べ床面積は約2万8500平方メートルで、敷地面積は旧病院の約4倍も確保した。建物のデザインのコンセプトは、「鹿児島らしさ」と「和」。エントランスホールには薩摩切子をモチーフとした日よけや桜島の火山灰を材料に用いたタイル、畳風のベンチなどを配置した。

病棟の床は木目調で統一され、外来受付の壁はシラス台地をイメージした。「患者さんが落ち着いて過ごせるような雰囲気になりました。来院された方からも好評です」と池田病院長は語る。機能面の大きな特徴は、「ワンループ動線」だ。1階に受付、診察室、会計薬

局を配置し、さらに放射線生理、検体検査などの外来機能も集約。患者が迷わずに移動できるようにした。救急外来の隣にはCT室を設けて迅速に検査し、救急専用のエレベーターで3階の手術室やHCU、7階の新型コロナウイルス病棟へ直接移動できる設計に。その他、回復期リハビリテーション病棟がある4階にリハビリ室、入院透析患者が多い5階の障がい者病棟に透析室を設けるなど、全体的に患者と職員の負担が少ない構造にした。

の搬送の際に使用するエアシユーター(気送管)、薬剤などを搬送する小荷物専用昇降機を導入。職員間の連絡ツールとして採用したスマートフォンには、業務の効率化を図るためにナースコールや見守りカメラとの連動機能が付いている。また、医局や事務部、看護部などがある2階には、子育て世代のために院内保育所を設け、働きやすい環境を整えた。

◎働きやすさテーマに

職員の働きやすさを考慮した仕掛けも多く施した。例えば、各課間で書類など

三つの基本方針で 医療機能向上図る

医療法人徳洲会 鹿児島徳洲会病院
鹿児島市南栄5-10-51 ☎099-268-1110(代表)
<https://www.kagotoku.jp/>

◎三つの基本方針を実践

新病院の医療面での基本方針は、三つある。短期的な目標としては救急・災害医療の強化、中長期の目標は離島・へき地医療の基幹病院を目指すこと、そして現在の強みをより伸ばすためにリハビリの充実を図ることだ。

救急医療に関しては、地域の強いニーズがある。移転先の谷山地域には市中央地域と比べて大規模病院が少なく、救急搬送の約半数を中央地域の急性期病院が受け入れているという現状がある。加えて周辺地域からも搬送依頼があるため、救急患者の受け入れ体制を強化することが急務だという。そのため、2022年度には救急救命士2人と診療看護師(NP)1人を新たに採用する。

離島・へき地医療については、実現に向けた思いが特に強く、現在、屋久島や与論島などの病院に看護師や臨床検査技師らが応援に行っているが、応援に行く医師の数が少ないことが大きな課題だと捉えている。

「今は全国のグループ病院から鹿児島県の離島に医師が応援に行っていますが、いずれは当院で人材を確保し、基幹病院の役割を果たしたい。今後は行政とも協力しながら、離島・へき地医療や、総合診療などに興味のある若い人材を当院に集めたいと思っています」